

数 学 I

(全 問 必 答)

第1問 (配点 20)

〔1〕 a, b を実数とする。 x についての方程式

$$(2a + 4b - 2)x^2 + (5a + 11)x - b - 8 = 0 \quad \cdots \cdots \text{①}$$

を考える。

(1) $a = 1$ とする。

b に着目すると、① の左辺は

$$(4x^2 - 1)b + 16x - 8 \quad \cdots \cdots \text{②}$$

と表せる。よって、② を因数分解すると

$$(2x - 1) \left(\boxed{\text{ア}} bx + b + \boxed{\text{イ}} \right)$$

となる。したがって、 $x = \frac{1}{2}$ は① の解の一つであることがわかる。

(数学 I 第1問は次ページに続く。)

(2) $b = 2$ とする。

(i) ① の左辺を因数分解すると

$$\left(\boxed{\text{ウ}}x + \boxed{\text{エ}} \right) \left\{ \left(a + \boxed{\text{オ}} \right)x - \boxed{\text{カ}} \right\}$$

となる。

(ii) $a = 2\sqrt{2}$ のとき、① の解は

$$x = -\frac{\boxed{\text{エ}}}{\boxed{\text{ウ}}}, \quad \boxed{\text{キ}} - \boxed{\text{ク}}\sqrt{2}$$

となる。

(iii) $a = -\boxed{\text{オ}}$ であることは、① の解が $x = -\frac{\boxed{\text{エ}}}{\boxed{\text{ウ}}}$ だけであるための $\boxed{\text{ケ}}$ 。

$\boxed{\text{ケ}}$ の解答群

- ① 必要条件であるが、十分条件ではない
- ② 十分条件であるが、必要条件ではない
- ③ 必要十分条件である
- ④ 必要条件でも十分条件でもない

(数学 I 第 1 問は次ページに続く。)

数学 I

[2]

(1) U を全体集合とし, A, B を U の部分集合とする。

U, A, B の関係を図 1 のように表すと, 例えば, $A \cap \bar{B}$ は, 図 2 の斜線部分となる。

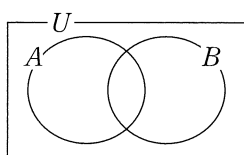


図 1

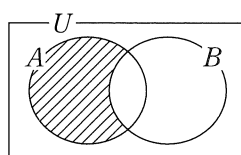
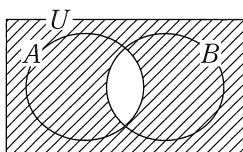


図 2

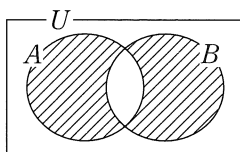
このとき, $(A \cap B) \cup (\bar{A} \cap \bar{B})$ は の斜線部分である。

については, 最も適当なものを, 次の①～⑤のうちから一つ選べ。

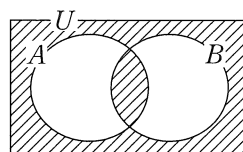
①



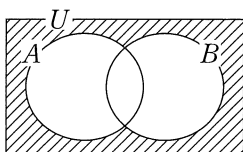
②



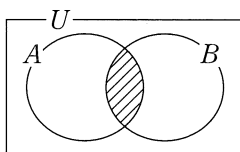
③



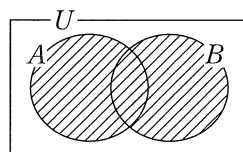
④



⑤



⑥



(数学 I 第 1 問は次ページに続く。)

(2) 全体集合 U を, $U = \{0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9\}$ とする。

(i) P, Q を U の部分集合とし

$$P = \{2, 3, 5, 8, 9\}, \quad Q = \{1, 3, 4, 5, 9\}$$

とする。このとき

$$P \cap Q = \{ \boxed{\text{サ}}, \boxed{\text{シ}}, \boxed{\text{ス}} \}$$

$$\bar{P} \cap \bar{Q} = \{ \boxed{\text{セ}}, \boxed{\text{ソ}}, \boxed{\text{タ}} \}$$

である。ただし

$$\boxed{\text{サ}} < \boxed{\text{シ}} < \boxed{\text{ス}}, \quad \boxed{\text{セ}} < \boxed{\text{ソ}} < \boxed{\text{タ}}$$

とする。

(ii) A, B を U の部分集合とし, $A = \{1, 4, 5, 7\}$ とする。

• B が $(A \cap B) \cup (\bar{A} \cap \bar{B}) = U$ を満たすとき, $B = \boxed{\text{チ}}$ である。

• B が $(A \cap B) \cup (\bar{A} \cap \bar{B}) = \emptyset$ を満たすとき, $B = \boxed{\text{ツ}}$ である。

$\boxed{\text{チ}}$, $\boxed{\text{ツ}}$ の解答群(同じものを繰り返し選んでもよい。)

① $\{0, 3, 5, 8\}$

① $\{1, 2, 6, 7\}$

② $\{1, 4, 5, 7\}$

③ $\{0, 2, 3, 7, 8\}$

④ $\{1, 5, 6, 8, 9\}$

⑤ $\{0, 2, 5, 6, 8\}$

⑥ $\{0, 2, 3, 6, 8, 9\}$

⑦ $\{0, 2, 4, 6, 7, 9\}$

⑧ $\{1, 2, 3, 5, 7, 9\}$

⑨ $\emptyset$

数学 I

第 2 問 (配点 30)

〔1〕 辺 AD と BC が平行である台形 ABCD があり

$$AD = 1, \quad BC = 12, \quad \tan \angle ABC = \frac{3}{4}, \quad \tan \angle BCD = 2$$

を満たしているとする。

(1) 点 A, D から直線 BC に引いた垂線と BC との交点を, それぞれ P, Q とする。このとき

$$BP + CQ = \boxed{\text{アイ}}, \quad BP = \frac{\boxed{\text{ウ}}}{\boxed{\text{エ}}} AP$$

となる。また

$$AP = \boxed{\text{オ}}$$

となる。

(数学 I 第 2 問は次ページに続く。)

(2) 対角線 AC と BD の交点を R とする。このとき

$$\tan \angle BCR = \frac{\boxed{\text{カ}}}{\boxed{\text{キ}}}, \quad \tan \angle CBR = \frac{\boxed{\text{ク}}}{\boxed{\text{ケ}}}$$

となる。したがって、 $\angle BRC$ の大きさは $\boxed{\text{コ}}$ 。

$\boxed{\text{コ}}$ の解答群

- ① 0° より大きく 45° より小さい
- ② 45° に等しい
- ③ 45° より大きく 90° より小さい
- ④ 90° に等しい
- ⑤ 90° より大きく 135° より小さい
- ⑥ 135° に等しい
- ⑦ 135° より大きく 180° より小さい

(数学 I 第 2 問は次ページに続く。)

数学 I

- 〔2〕 図1のように、直線 ℓ 上の点 A において ℓ に接する半径 2 の円を円 O とし、 ℓ 上の点 B において ℓ に接する半径 4 の円を円 O' とする。円 O と O' は 2 点で交わるとし、その交点を P, Q とする。ただし、 $\angle APB < \angle AQB$ とする。さらに、 $\angle PAB$ は鋭角であるとする。このとき、 $\triangle PAB$ と $\triangle QAB$ について考えよう。

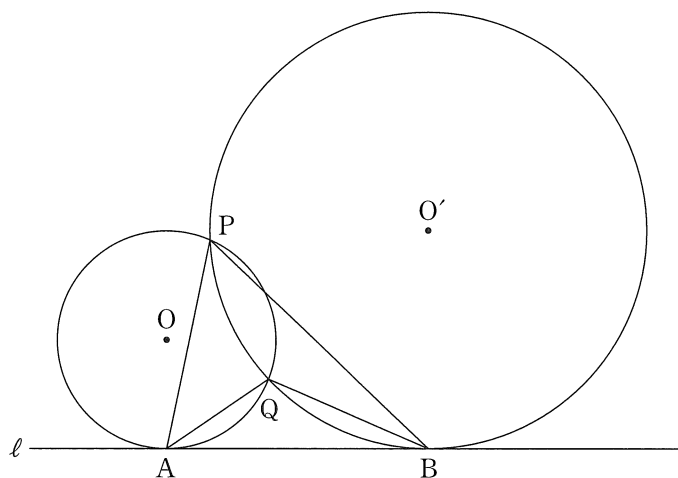


図 1

- (1) $\angle PAB = \alpha$, $\angle PBA = \beta$ とおく。

円 O の中心 O から直線 PA に引いた垂線と直線 PA との交点を H とする。 $\angle OAB = 90^\circ$ であるから、 $\angle AOH = \alpha$ である。よって、 $\triangle OAH$ に着目すると、 $AH = \boxed{\text{サ}} \sin \alpha$ であるから

$$PA = 2 AH = \boxed{\text{シ}} \sin \alpha \dots\dots\dots \text{①}$$

である。

(数学 I 第 2 問は次ページに続く。)

数学 I

同様にして、円 O' の中心 O' から直線 PB に引いた垂線と直線 PB との交点を H' とすると

$$PB = 2 BH' = \boxed{\text{ス}} \sin \beta \dots\dots\dots \textcircled{2}$$

であることもわかる。

また、 $\triangle PAB$ の外接円の半径を R_1 とおくと、正弦定理により

$$\frac{PA}{\sin \boxed{\text{セ}}} = \frac{PB}{\sin \boxed{\text{ソ}}} = 2 R_1$$

が成り立つので

$$PA \sin \boxed{\text{ソ}} = PB \sin \boxed{\text{セ}}$$

である。この式に、 $\textcircled{1}$ と $\textcircled{2}$ を代入することにより

$$\sin \boxed{\text{ソ}} = \sqrt{\boxed{\text{タ}}} \sin \boxed{\text{セ}}$$

$$PB = \sqrt{\boxed{\text{タ}}} PA$$

となることがわかる。さらに

$$R_1 = \boxed{\text{チ}} \sqrt{\boxed{\text{ツ}}}$$

が得られる。

$\boxed{\text{セ}}$ ， $\boxed{\text{ソ}}$ の解答群 (同じものを繰り返し選んでもよい。)

$\textcircled{0} \quad \alpha$	$\textcircled{1} \quad \beta$
--------------------------------	-------------------------------

(数学 I 第 2 問は次ページに続く。)

数学 I

- (2) 太郎さんと花子さんは、(1) の考察を振り返っている。

太郎：△QAB の外接円の半径も求められるかな。

花子：(1) の R_1 の求め方を参考にすればよさそうだね。

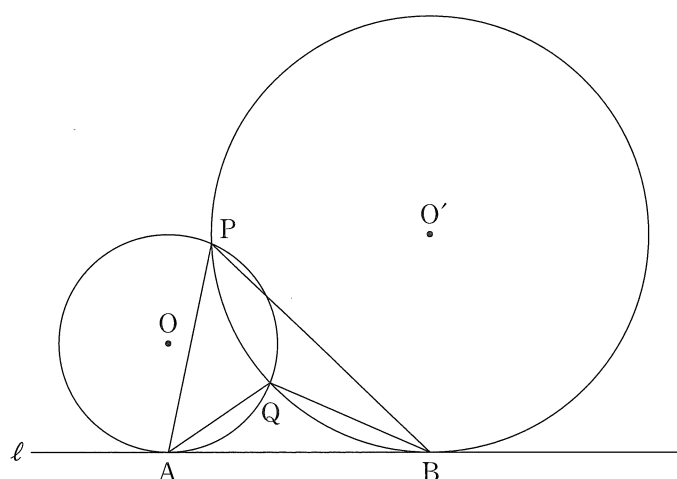


図 1 (再掲)

△PAB, △QAB の外接円の半径をそれぞれ R_1 , R_2 とおく。このとき,
 R_1 R_2 である。さらに, $\sin \angle APB$ $\sin \angle AQB$ であることも
 わかる。

, の解答群 (同じものを繰り返し選んでもよい。)

① < ② = ③ >

(数学 I 第 2 問は次ページに続く。)

- (3) 太郎さんと花子さんは、これまでの考察をもとに、 $\triangle PAB$ と $\triangle QAB$ の辺の長さについて考えている。

太郎：AB の長さが与えられれば、PA と QA の長さが求められそうだね。

花子： $\angle APB < \angle AQB$ に注意して求めてみようよ。

$AB = 2\sqrt{7}$ とする。このとき

$$\sin \angle APB = \frac{\sqrt{\boxed{\text{ナニ}}}}{\boxed{\text{ヌ}}}$$

である。(1) より、 $PB = \sqrt{\boxed{\text{タ}}}$ PA であるから

$$PA = \sqrt{\boxed{\text{ネノ}}}$$

である。

同様に、 $QA = \sqrt{7}$ であることがわかる。

数学 I

第 3 問 (配点 30)

〔1〕 $f(x) = 3x^2 + 18x + 20$ とする。

(1) 2 次関数 $y = f(x)$ のグラフの頂点の座標は

(,)

である。また, 2 次方程式 $f(x) = 0$ は 。

の解答群

- ① 異なる二つの正の解をもつ
- ② 正の解と負の解を一つずつもつ
- ③ 異なる二つの負の解をもつ
- ④ 実数解をもたない

(数学 I 第 3 問は次ページに続く。)

- (2) s を定数とし、 $y = f(x)$ のグラフを、 x 軸方向に s 、 y 軸方向に -5 だけ平行移動した放物線をグラフとする 2 次関数を $y = g(x)$ とおく。

(i) このとき

$$g(x) = 3x^2 + (18 - \boxed{\text{カ}}s)x + \boxed{\text{キ}}(s^2 - \boxed{\text{ク}}s + \boxed{\text{ケ}})$$

である。

- (ii) 太郎さんと花子さんは、2 次方程式 $g(x) = 0$ が 0 でない実数解をもつときの、その解の正負について考えている。

太郎：2 次方程式 $g(x) = 0$ の実数解の正負が知りたいだけなら、解を具体的に求める必要はないね。

花子：そうだね。2 次関数 $y = g(x)$ のグラフと、 x 軸、 y 軸との位置関係を考えればわかるね。

2 次方程式 $g(x) = 0$ が正の解と負の解を一つずつもつような定数 s の値の範囲は $\boxed{\text{コ}} < s < \boxed{\text{サ}}$ である。

- (3) t を定数とし、 $y = f(x)$ のグラフを、 x 軸方向に t 、 y 軸方向に $t^2 - 6t$ だけ平行移動した放物線をグラフとする 2 次関数を $y = h(x)$ とおく。2 次方程式 $h(x) = 0$ が異なる二つの正の解をもつような定数 t の値の範囲は $\boxed{\text{シ}} < t < \boxed{\text{ス}}$ である。

(数学 I 第 3 問は次ページに続く。)

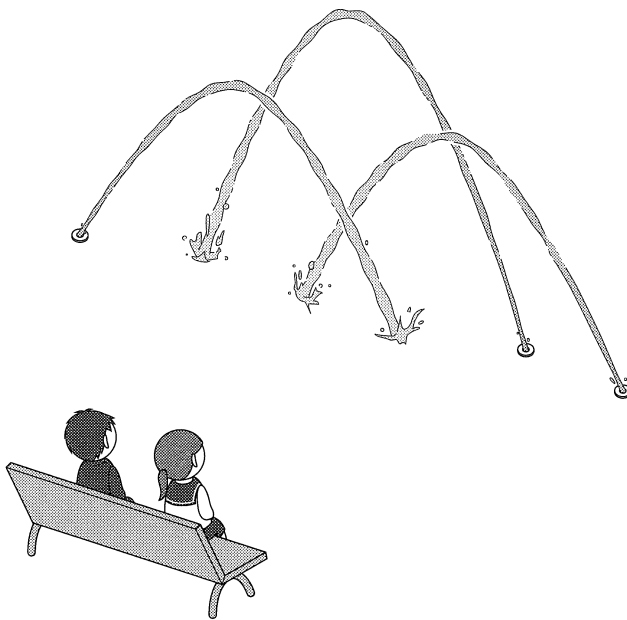
数学 I

〔2〕 花子さんと太郎さんは、公園にある二つの小さな噴水と一つの大きな噴水の
高さについて話している。

花子：あの中央の大きな噴水の高さは何メートルだろう。

太郎：実際に高さを測定するのは難しそうだね。噴水の水がえがく曲線
は、放物線になると聞いたことがあるよ。

花子：じゃあ、放物線と仮定して、およその高さを考えてみよう。



参考図

(数学 I 第 3 問は次ページに続く。)

数学 I

花子さんと太郎さんは、噴水の高さについて次のように考えることにした。

噴水の水がえがく曲線は三つとも放物線とする。三つの噴水の水が出る位置は水平な地面にある。図 1 のように座標軸が定められた平面上に、三つの噴水を正面から見た図をかく。左右の小さな噴水の水がえがく放物線については後の**仮定 1**を、中央の大きな噴水の水がえがく放物線については後の**仮定 2**を設定する。図 1 の P_1 , P_2 , P_3 は噴水の水が出る位置である。なお、長さの単位はメートルであるが、以下では省略する。

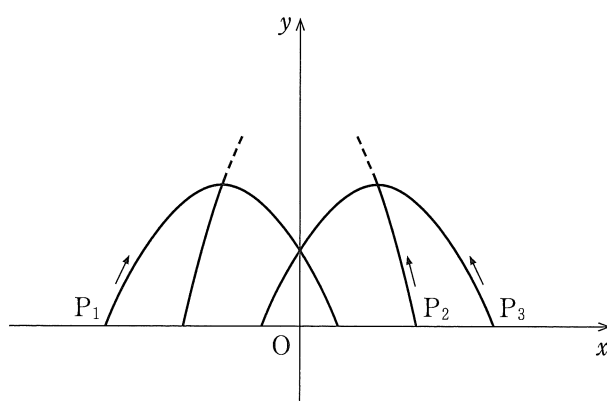


図 1

(数学 I 第 3 問は次ページに続く。)

数学 I

仮定 1

- 左側の小さな噴水の水がえがく放物線 C_1 は, x 軸上の点 $P_1\left(-\frac{5}{2}, 0\right)$ から出て点 $\left(\frac{1}{2}, 0\right)$ に至る。
- 右側の小さな噴水の水がえがく放物線 C_3 は, x 軸上の点 $P_3\left(\frac{5}{2}, 0\right)$ から出て点 $\left(-\frac{1}{2}, 0\right)$ に至る。
- C_1 と C_3 はともに点 $(0, 1)$ を通る。

仮定 2

中央の大きな噴水の水がえがく放物線 C_2 は, x 軸上の点 $P_2\left(-\frac{3}{2}, 0\right)$ から出て C_3 の頂点と C_1 の頂点を通る。

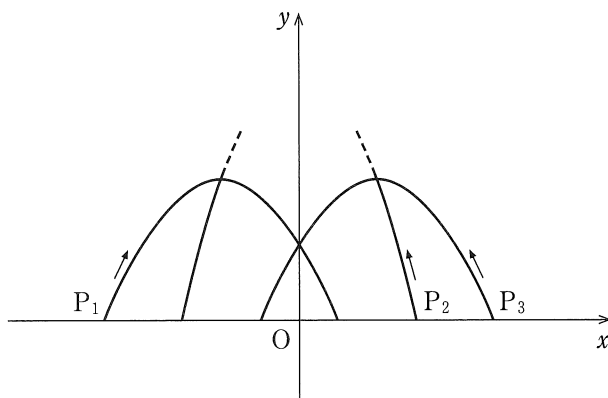


図 1 (再掲)

(数学 I 第 3 問は次ページに続く。)

数学 I

- (1) 仮定1と仮定2のもとで考える。 C_1 をグラフにもつ2次関数を $y = ax^2 + bx + c$ とする。このとき $c =$ セ であり、また

$$y = -\frac{\text{ソ}}{\text{タ}}x^2 - \frac{\text{チ}}{\text{ツ}}x + \text{セ}$$

である。

C_1 の頂点の y 座標は $\frac{\text{テ}}{\text{ト}}$ である。このことを用いると、 C_2 の頂点

の y 座標は $\frac{\text{ナニ}}{\text{ヌネ}}$ であることがわかる。

したがって、大きな噴水の高さは、小さな噴水の高さの ノ である。

ノ については、最も適当なものを、次の①～③のうちから一つ選べ。

① およそ2倍

① およそ3倍

② およそ4倍

③ およそ5倍

(数学 I 第3問は次ページに続く。)

数学 I

- (2) 花子さんと太郎さんは、大きな噴水の高さについて話している。

花子：正面から見たとき，大きな噴水が小さな噴水の頂点を通って見えるというデザインは変えずに，大きな噴水の高さを変えることはできるのかな。

太郎：左右の二つの小さな噴水は変えずに，大きな噴水の水が出る位置を変えてみたらどうかな。

花子：大きな噴水の高さが5メートルになるときの水が出る位置を考えてみよう。

(数学 I 第 3 問は次ページに続く。)

仮定 2 の代わりに次の仮定 2' をおく。

仮定 2'

- 中央の大きな噴水の水がえがく放物線 C_2' は, x 軸の正の部分の点 P_2' から出て C_3 の頂点と C_1 の頂点を通る。
- C_2' の頂点の y 座標は 5 である。

仮定 1 と仮定 2' のもとで考える。このとき, P_2' は P_2 より $\frac{\text{ハ}}{\text{ヒ}}$ だけ

フ の方にある。

フ の解答群

① P_1

② P_3

数学 I

第 4 問 (配点 20)

以下の問題を解答するにあたっては，与えられたデータに対して，次の値を外れ値とする。

「(第 1 四分位数) $- 1.5 \times$ (四分位範囲)」以下の値

「(第 3 四分位数) $+ 1.5 \times$ (四分位範囲)」以上の値

太郎さんは，47 都道府県における外国人宿泊者数と日本人宿泊者数の動向を調べるため，それらに関するデータを分析することにした。外国人宿泊者数を，日本国内に住所を有しない宿泊者の人数の 1 年間の合計とし，日本人宿泊者数を，日本国内に住所を有する宿泊者の人数の 1 年間の合計とする。宿泊者数に関するデータは千の位を四捨五入し，1 万人単位で表したものとし，以下においては単位(万人)を省略して用いることとする。例えば，「4567890 人」は「457」とする。

なお，以下の図や表については，国土交通省の Web ページをもとに作成している。

(数学 I 第 4 問は次ページに続く。)

(1)

- (i) 図 1 は、47 都道府県における令和 4 年の外国人宿泊者数と日本人宿泊者数の散布図である。なお、散布図には原点を通り、傾きが 10 の直線(破線)を付加している。また、日本人宿泊者数が 1000 を超える都道府県の数 は 12 である。

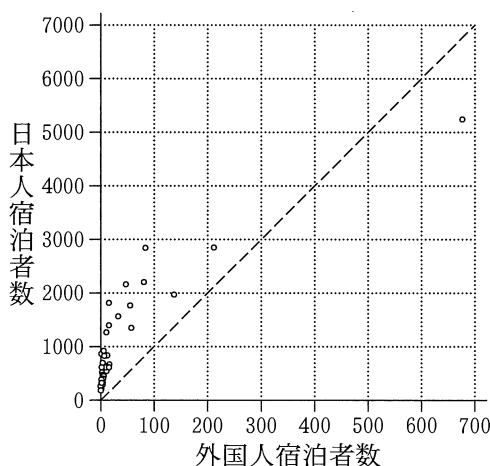


図 1 令和 4 年の外国人宿泊者数と日本人宿泊者数の散布図

次の (a), (b) は、図 1 に関する記述である。

- (a) 令和 4 年について、外国人宿泊者数が 100 を超え、かつ日本人宿泊者数が 2500 を超える都道府県の数 は 2 である。
- (b) 令和 4 年について、日本人宿泊者数が外国人宿泊者数の 10 倍未満である都道府県の割合は 50 % 未満である。

(a), (b) の正誤の組合せとして正しいものは ア である。

ア の解答群

	①	②	③	④
(a)	正	正	誤	誤
(b)	正	誤	正	誤

(数学 I 第 4 問は次ページに続く。)

数学Ⅰ

- (ii) 47 都道府県における令和 4 年の外国人宿泊者数を分析した結果、外れ値となる都道府県の数 は 8 であった。

一方、表 1 は 47 都道府県における令和 4 年の日本人宿泊者数を、値の小さい順に並べ、その順に都道府県 P 1, P 2, …, P 47 としたものである。この中で、外国人宿泊者数で外れ値となる都道府県 (P 37, P 40, P 42, P 43, P 44, P 45, P 46, P 47) に印 * を付けている。

表 1 47 都道府県における令和 4 年の日本人宿泊者数

都道府県	日本人 宿泊者数	都道府県	日本人 宿泊者数	都道府県	日本人 宿泊者数	都道府県	日本人 宿泊者数
P 1	182	P 13	373	P 25	620	P 37*	1339
P 2	187	P 14	388	P 26	625	P 38	1399
P 3	197	P 15	395	P 27	646	P 39	1547
P 4	204	P 16	401	P 28	670	P 40*	1765
P 5	255	P 17	405	P 29	683	P 41	1814
P 6	270	P 18	452	P 30	705	P 42*	1970
P 7	276	P 19	458	P 31	831	P 43*	2158
P 8	286	P 20	501	P 32	832	P 44*	2195
P 9	303	P 21	522	P 33	839	P 45*	2831
P 10	321	P 22	537	P 34	876	P 46*	2839
P 11	328	P 23	605	P 35	925	P 47*	5226
P 12	351	P 24	613	P 36	1251		

表 1 のデータにおいて、四分位範囲は イ となることから、令和 4 年の外国人宿泊者数と日本人宿泊者数の両方で外れ値となる都道府県の数 は ウ である。

イ の解答群

① 320	② 450	③ 597	④ 638	⑤ 900
⑥ 966	⑦ 1253	⑧ 1261	⑨ 1602	⑩ 1864

(数学Ⅰ第 4 問は次ページに続く。)

- (iii) 令和 4 年の外国人宿泊者数と日本人宿泊者数について，両方で外れ値となる都道府県を除いたデータで散布図を作成したところ，正の相関があることがわかった。このときの相関係数を計算するために，表 2 のように，平均値，標準偏差および共分散を求めた。

表 2 両方で外れ値となる都道府県を除いた令和 4 年の外国人宿泊者数と日本人宿泊者数の平均値，標準偏差，共分散

	平均値	標準偏差	共分散
外国人宿泊者数	15	26	11373
日本人宿泊者数	739	552	

表 2 を用いると，両方で外れ値となる都道府県を除いた令和 4 年の外国人宿泊者数と日本人宿泊者数の相関係数は 工 である。

工 については，最も適当なものを，次の①～⑦のうちから一つ選べ。

① 0.03	② 0.21	③ 0.59	④ 0.68
⑤ 0.79	⑥ 0.97	⑦ 1.03	⑧ 1.26

(数学 I 第 4 問は次ページに続く。)

数学 I

- (2) 47 都道府県におけるある年の外国人宿泊者数を x ，日本人宿泊者数を y とし， x と y の値の組を，それぞれ

$$(x_1, y_1), (x_2, y_2), \dots, (x_{47}, y_{47})$$

と表す。 x ， y の平均値をそれぞれ $\bar{x}$ ， $\bar{y}$ とし， x ， y の分散をそれぞれ s_x^2 ， s_y^2 とする。また， x と y の共分散を s_{xy} とする。

47 都道府県それぞれにおける外国人宿泊者数と日本人宿泊者数を足し合わせた合計宿泊者数を z とし，その値を

$$z_i = x_i + y_i \quad (i = 1, 2, \dots, 47)$$

と表す。例えば， $i = 7$ のときは $z_7 = x_7 + y_7$ である。

- (i) z の平均値を $\bar{z}$ とするとき

$$z_i - \bar{z} = (x_i - \bar{x}) + (y_i - \bar{y}) \quad (i = 1, 2, \dots, 47)$$

である。このことに着目すると， z の分散を s_z^2 とするとき， $s_z^2 = \boxed{\text{オ}}$ となる。

(数学 I 第 4 問は次ページに続く。)

また、令和 4 年の x と y の間には正の相関があることが図 1 からわかる。このことから、令和 4 年について、 s_z^2 と $s_x^2 + s_y^2$ の関係として、後の①～③のうち、正しいものは **カ** であることがわかる。

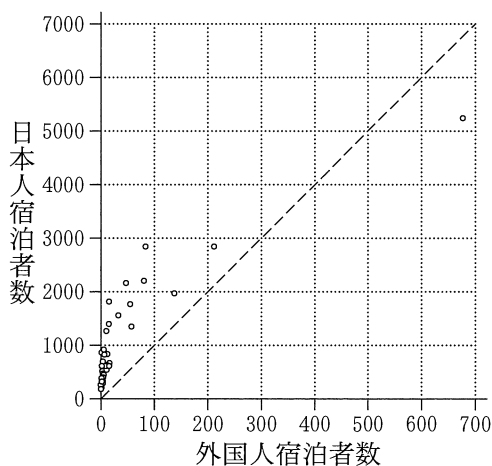


図 1 (再掲)

オ の解答群

- | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|-------------------|
| ① $s_x^2 + s_y^2 - 2s_{xy}$ | ② $s_x^2 + s_y^2 - s_{xy}$ | ③ $s_x^2 + s_y^2$ |
| ④ $s_x^2 + s_y^2 + s_{xy}$ | ⑤ $s_x^2 + s_y^2 + 2s_{xy}$ | |

カ の解答群

- ① $s_z^2 > s_x^2 + s_y^2$
 ② $s_z^2 = s_x^2 + s_y^2$
 ③ $s_z^2 < s_x^2 + s_y^2$

(数学 I 第 4 問は次ページに続く。)

数学 I

- (ii) 太郎さんは、合計宿泊者数 z の変化に関心をもち、 z についての前年との比に着目することにした。

例えば、(1) の (ii) における都道府県 P 22 の z は令和 2 年では 450 であり、令和 3 年では 376 であった。このとき、都道府県 P 22 における令和 3 年の z についての前年との比は、376 を 450 で割った値である。以下においては、それぞれの都道府県におけるある年の z についての**前年比**を、次のように定める。

前年比

ある年の z を、その前年の z で割った値

図 2 は、47 都道府県における令和元年から令和 4 年までの**前年比**の箱ひげ図を並べたものである。図 2 にある四つの箱ひげ図において、**前年比**の外れ値は、白丸で示されている。

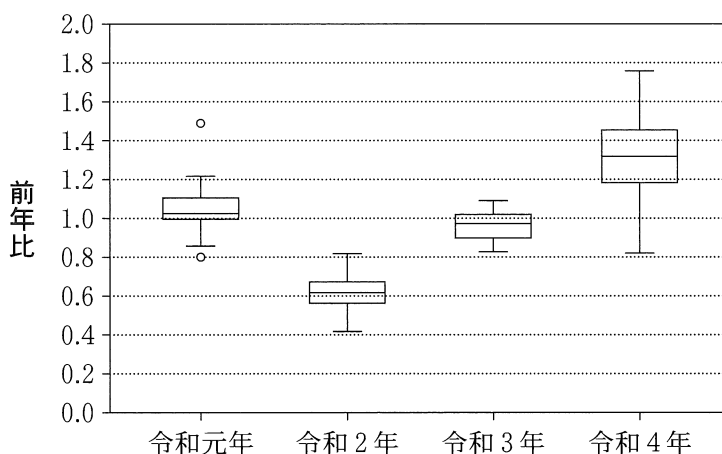


図 2 47 都道府県における令和元年から令和 4 年までの
前年比の箱ひげ図

(数学 I 第 4 問は次ページに続く。)

次の (a), (b), (c) は、図 2 に関する記述である。

- (a) 令和元年の箱ひげ図において外れ値となる都道府県はすべて、令和 4 年においても外れ値となっている。
- (b) すべての都道府県において、令和 2 年の z は令和元年よりも減少している。
- (c) 令和 4 年の前年比が 1 より小さい都道府県の数、令和 3 年の前年比が 1 より小さい都道府県の数よりも少ない。

(a), (b), (c) の正誤の組合せとして正しいものは キ である。

キ の解答群

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
(a)	正	正	正	正	誤	誤	誤
(b)	正	正	誤	誤	正	正	誤
(c)	正	誤	正	誤	正	誤	正

(数学 I 第 4 問は次ページに続く。)

数学 I

- (3) 太郎さんが住む地域では、その地域に宿泊を促すためのキャンペーンとして、キャンペーン A, B が実施されている。

太郎さんは、キャンペーン A の方がよいと思っている人が多いといううわさを聞いた。このうわさのとおり、キャンペーン A の方がよいと思っている人が多いといえるかどうかを確かめることにした。そこで、かたよりなく選んだ人たちに、キャンペーン A, B のどちらがよいかについて、二択のアンケートを行ったところ、アンケートに回答した 35 人のうち、23 人が「キャンペーン A の方がよい」と答えた。この結果から、一般にキャンペーン A の方がよいと思っている人が多いといえるかどうかを、次の方針で考えることにした。

方針

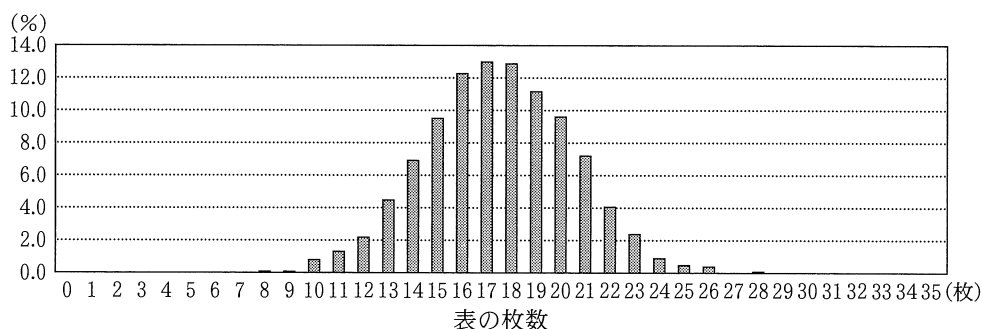
- “「キャンペーン A の方がよい」と回答する割合と「キャンペーン B の方がよい」と回答する割合は等しい”という仮説を立てる。
- この仮説のもとで、かたよりなく選ばれた 35 人のうち 23 人以上が「キャンペーン A の方がよい」と回答する確率が 5 % 未満であれば、その仮説は誤っていると判断し、5 % 以上であればその仮説は誤っているとは判断しない。

後の実験結果は、35 枚の硬貨を投げる実験を 1000 回行ったとき、表が出た枚数ごとの回数の割合を示したものである。

(数学 I 第 4 問は次ページに続く。)

実験結果

表の枚数(枚)	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
割合(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.8	1.3
表の枚数(枚)	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
割合(%)	2.2	4.5	6.9	9.5	12.3	13.0	12.9	11.2	9.6	7.2	4.1	2.4
表の枚数(枚)	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
割合(%)	0.9	0.5	0.4	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0



実験結果を用いると、35 枚の硬貨のうち 23 枚以上が表となった割合は、
 . %である。これを、35 人のうち 23 人以上が「キャンペーン A
 の方がよい」と回答する確率とみなし、方針に従うと、“「キャンペーン A の方が
 よい」と回答する割合と「キャンペーン B の方がよい」と回答する割合は等しい”
 という仮説は 。したがって、今回のアンケート結果からは、キャンペー
 ン A の方がよいと思っている人が .

, については、最も適当なものを、次のそれぞれの解答群から
 一つずつ選べ。

の解答群

- ① 誤っていると判断する ② 誤っているとは判断しない

の解答群

- ① 多いといえる ② 多いとはいえない

数学 I

(下書き用紙)